

## 大阪万博の環境アセスメント

写真は参道正面から撮った大阪天満宮。大阪の人たちから「天満の天神さん」と親しまれている。この参道を真っすぐ行くと、大阪自然環境保全協会の事務所がある。入口には「ネイチャーおおさか・身近な自然を大切に！」と書かれた幟が立っていた。

この協会は「身近な自然を愛し、これを守り育てたいと願う市民が運営している民間の自然保護団体」であり、社団法人として 1976 年に設立された。大阪の各地で「自然観察会」など多彩な活動を展開している。2 月 23 日に万博をテーマに講演したとき、参加者から会についてお聞きして、事務所を訪ねることになった。



昨日、ここの事務所で 2005 年愛知万博の経験について話し、2025 年に予定されている大阪・関西万博の環境アセスメントなどについて意見交換した。愛知万博は迷走を続け、「海上の森」という里山から会場を変更して、なんとか開催にこぎつけた。会場変更させたのは、地元の環境保護団体の長年にわたる活動であり、それが国内外の環境団体、そして BIE(博覧会国際事務局)までも突き動かしたことによる。市民が意見してきた万博の環境アセスメントも、会場変更に力を発揮した。

大阪万博の会場予定地は大阪湾の人工島「夢洲」である。災害リスクが大きく、万博の理念に反するカジノと隣り合わせの夢洲に固執すると、大阪万博も愛知のように迷走するであろう。大阪万博はまだ「仮免許」の段階であり、これから会場計画などを煮詰め、環境アセスメントを愛知の経験を踏まえて実施させていく必要がある。活発な質疑を通して、大阪万博の問題点を再確認できた。夢洲の災害リスクはカジノとともに、BIE を突き動かすことになるのではないかと注視する必要がある。

それと夢洲の自然環境保全の意義について、多くのことを学んだ。頂戴した『都市と自然』513 号に、「生物多様性ホットスポット・夢洲の未来を考える」と題した報告が掲載されていた。夢洲の現地調査の貴重な記録であり、じつに興味深い。報告のさいごを紹介しておきたい。

「いのち輝く未来社会のデザイン」これが、大阪・関西万博のテーマだ。国際目標である持続可能な開発目標(SDGs)のもとに、夢洲を、今後も生物多様性のホットスポットとして、世界有数の閉鎖性海域である瀬戸内海の重要な湿地となるべく、できるだけそのまま、緩やかに、人間の生活とともに育てていけないものだろうか。私たち環境保護団体は、夢洲にどのような未来を描くべきか、今、問われている。

(2019 年 4 月 30 日)